

米と父とぼく

長岡市立北辰中学校 一年 清水 正晴

ぼくは「お米」という食べ物には、ありふれたふつうにある食べ物だと思っ
ていた。だが、この米には、ぼくと、七く
なっ た父とのたくさんの思いが結ま
っ ている。

父は和島剣道教室の指導員だ
った。ぼくには、はすごく厳し
かった。そのため、家でも、あ
まり話さなかつたが、唯一話
すのが、ご飯の時だ。た。

父は剣道と同じくらい料理が
うまく、休みの日には、ご飯を
炊き、ご飯にあうおかずをい
つも作っ てくれた。

例えば、ぶた肉とキャベツの炒
め物。ご飯といっしょに食べる
と、三は、四は、食べられる。
父はいつも、

「これ、意外とうまいだろ！」
と、言う。ぼくは、それを、

「うん！」

と返す。

父は少し硬めにご飯を炊く。母は、やわらかめでご飯を炊く。父は、やわらかいご飯はあまり好きではないので、母のやわらかいご飯をリゾットにしていた。リゾットは、ご飯があつあつで、チリズバがかかっている、すぐくおもしろかった。

父は、ぼくたちの喜ぶ姿を見たかったのだ。ろろ。そして、ぼくたちにおいしい物を食べさせてあげようとしたのだ。母は、

回転ずしに行っても、母は、

「あんまり食べすぎないで。」

というのに対して、父は、

「ぜんぜん食べろ。」

とか、「一皿食べ終わると、

「次、何食うんだ。」

などと言ってきて、結局いっぱい食べてしま

うことはかりだ。た。

そして、父が作る中でも一番とべられたい

のは、チャーハンだ。た。

剣道の大会の後、父は、

「家で反省会しますよ。」
と、みんなに声をかける。それぞれが、おか
ずを持ち寄り、父も、はりきって料理をふる
まう。試合に勝って負けても、父は、試合
で疲れたぼくたちに、手のこんだ料理を作っ
てくれた。

父は、いつも
全部食べるまで帰らせないぞ！
と言うので、みんなで大皿に山盛りのチヤ
ーハンを分けて、がんばって食べた。

「男は米を食べ！」「はい、食べないと強くな
れないぞ！」
「はい！」
お腹がいっぱいになりながら、うも食べたケヤ
ーハンは、父らしく、油多めの、味こいめだ
、たけで、とてもおいしかった。父は、自分
の作った料理がたいらげられるのを見て、に
こやかに満足そうにしていた。

そんな父は、地区大会の慰労会の翌日、突

然倒れ、意識が戻ることなく、旅立ってしまった。

ぼくは、今でも信じられず、あんなに

強くて、あんなにぼくたちのことを思ってく

れた父がいなくなっってしまったことを、受け

入れることができない。

だが、父の作ってくれたご飯で、こゝまで

育つことができた。仲間達とも楽しい時間を

過ごすことができた。

そして、何より、父が作ってくれたご飯の

味と、それを食べて喜ぶぼくたちを見つめる

父のうれしそうな顔を、ぼくは忘れない。

ぼくが中学生になったころ、父が、

「正晴、今度からこれで飯を食べる

と言っ、どんぶり茶わんを買ってきてくれ

た。

ぼくは、このどんぶり茶わんでしっかりご

飯を食べしっかり体を作り、いつか父をこ

える。